

お寺の石段^{てら いしだん}

■ 楽曲データ

歌詞：吉江久彌 作詞

楽曲：中田喜直 作曲

発表：大谷楽苑

初演：—

初出：『讃仰歌』 大谷楽苑 1960年

管理番号：M0893

■ 創作の経緯

大谷楽苑による「讃仰歌」第24番として発表。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第4巻収録

底資料：『讃仰歌』 大谷楽苑 1960年

比較資料：—

校訂の詳細：特になし

■ 解説

「幼いときの遊び場は、お寺でした」「お寺の日曜学校で、いろんなことを覚えました」——このように、お寺で遊んだ思い出をお持ちの方も多いのではないのでしょうか。お寺の石段はじゃんけん遊びの格好の場でしたし、境内は石けりや鬼ごっこの舞台でした。のどかで、おだやかで、ゆったりとした時間がありましたね。

《お寺の石段》は、そのような記憶を呼びさます、懐かしい雰囲気のお寺讃歌です。

◆ 作詞者について

作詞の吉江久彌さんは、1917（大正6）年、富山県生まれ。東京高等師範学校・東京文理科大学国語国文学科（旧制）を卒業。専攻は近世日本文学で、佛教大学教授を務めました。仏教関係では『タゴールと賢治——まことの詩人の宗教と文学』（武蔵野書院、1999年）という著作があります。

詞は3連からなり、平易な言葉で書かれています。子ども達がお寺の石段の上から夕焼けを眺め、仏さまの国や田舎のおばあちゃんに思いをめぐらせる、という光景が描き出されます。

◆作曲者について

作曲は、中田喜直（1923～2000）。父・中田章（1886～1931、唱歌《早春賦》の作曲者）の影響もあったのか、幼い頃から音楽に親しみ、小学生のときにはすでにピアノ曲や童謡を作曲していました。ピアニストを目指すも手の小ささに悩んで断念した後、1946（昭和21）年に作曲グループ「新声会」へ入り、本格的に創作活動を始めました。作品は童謡・歌曲・流行歌など多岐にわたり、その数は1000曲以上にのぼります。

本願寺派とも関係が深く、《ありがとう》《そんなときわたしはくちずさむ》などの仏教讃歌や、《幼児のおつとめ》を創作しました。

◆演奏のヒント（旋律について）

混声四部合唱で作曲されています。斉唱する場合は、ソプラノのパートを旋律として歌い、伴奏には合唱譜をそのまま用います。曲想が「わらべうた風に」と指示されていますが、作曲上も言葉の反復などにより、「わらべうた風」な趣をいっそう高めています。

- ①歌いだしは、「ラ」→「レ」の音程に注意して、快活に。
- ②1～4小節目は、付点のリズム（付点8分音符+16分音符）が連続します。まりつきをするように、少しはずんで歌いましょう。
- ③4小節目は、前小節の繰り返しです。楽譜に指定されているように、ピアノニッシモ（非常に弱く）で歌いましょう。こだまのように。
- ④5小節目からは、レガートに（なめらかに）歌うよう心がけましょう。
- ⑤6小節目の高い「ミ」は、ピッチ（音高）を正確に。また、8分音符をなめらかに歌いましょう。
- ⑦12小節目の歌詞は「ドレミファソ」ですが、メロディー自体は長音階ではないので、注意してください。
- ⑧15小節目、17・18小節目などの長い音は、最後まで正しい音高を保ちましょう。

◆用途など

仏教婦人会の例会、日曜学校や子ども会などで、ぜひお子さんやお孫さんと一緒に歌ってください。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 48（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第175号収録）を加筆・修正のうえ、転載。